

2020年12月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

---

中村和弘

<白頭鷲>

心拍の聞えそうなる良夜かな  
爆破せし山の残りて薄紅葉  
白頭鷲ビバリーヒルズを掠め飛ぶ  
綿虫の吸われしごとく消えにけり  
竹林の青の尊し時雨くる  
捨犬を苛むごとく芒の穂  
狼の頭骨黒く祭りたり

---

大石雄鬼

<人間の模様>

鹿鳴いて箏箏の奥のひつかかる  
その影の黒く膨らみ桃実る  
仏像の首のつながり茶が咲けり  
鼻の目のぐらぐらと街を視る  
人間の模様のやうな干菜汁  
万華摺みし指の胼深し  
光に光あたつてゐたり酉の市

---

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

新涼や出所不明のネジひとつ 永井アイ子  
雲を呼び風を起こしてばつた飛ぶ 中村仿湖  
湯のたぎる音のはるか山眠る 吉本のぶこ  
抱けば目を瞑る雌鹿銀河系 瀬間陽子  
真つ白のケトル噴きおり秀野の忌 佐藤禎子  
老眼や金魚ねぶたに大きな目 堀 尚子

さきがけて街灯ともる野分中 富田栄子  
月光の刻める襷や比叡山 田中眞青  
土間ありてちちろの声の透りたる 温井幸子  
虫売りのかご青くさし耳寄せる 古閑容子  
稲の香の甘く漂ふ星の道 及川明子  
奔放に稲妻はしる牡蠣筏 多摩川州  
明日香風早稲の重みをたなごころ 猪狩鳳保  
伝説の姫の碑囲み稲の波 西村敏子  
コロナ禍や神に供ふる青林檎 吉見弘子  
落ち柿のおちし所で色付きぬ 森井美恵子  
隙間から天使の梯子いわし雲 桜田花音  
百才の人の行き交う百日紅 石井節子  
原一面白露輝く刹那かな 平 恵  
向日葵の蕊に重なるコロナ影 志和雅代  
赤とんぼ風の泣く朝生まれたの 朴美代子

2020年11月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

---

中村和弘

<鬼神>

アルマイトどこか凹みて終戦日  
大鐘の余韻にのりて藪蚊くる  
マグマより噴き出す如く曼殊沙華  
捨て犬の怯え鳴きする芒原  
浜名湖に柿剥く皮のとどきけり  
稲雀数羽こぼれて埒の木  
稲雀ぶつかりあいて埒の木  
バリ島の鬼神華ぎ熱帯夜

---

大石雄鬼

<もやもや>

折り鶴の裏のはみだす晩夏光  
神がとちこもつてゐるか木槿咲く  
眼球の硬さの潜みたる花野  
月光やベビーズの生ぬるし  
盗み見のごとくに月の細りたる  
柿が手に眠さうにゐる真昼かな  
後頭部のもやもやとして雁渡る

---

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

烏瓜戦時の神のにはほひする      小菅 白籐  
春の月羽化をこらえる震えかな      瀬間 陽子

撥ね出たる赤子の足や夏祓 石川真木子  
発電機の唸るがごとく大暑かな 上田 桜  
ベルの有る古い自転車油照り 永井アイ子  
水すまし肉球型の影を持つ 當山孝道  
天に叫ぶ明器の駱駝銀河濃し 十亀カツ子  
汗のまま千人針に佇めり 浪本恵子  
水泳の歌の遙かや熊野灘 荒堀かおる  
秋暑し巫女の腕の太い数珠 牧ひろし  
アビニョンに罌粟粟紅し晶子の忌 今田克  
石垣に遊び石あり赤蜻蛉 富田栄子  
紫陽花の窪に卵の余韻かな 佐々木貴子  
破れジーパン若さあふるるほど寂し 石堂つね子  
土用あい素振り少年横並び 本多洋子  
舟虫のざはめき残るいなびかり 猪狩鳳保  
前に行く日傘の男子色気あり 森池義子  
股割の黒痣長し凌霄花 藤川夕海  
大南瓜ごろりと山の開墾地 佐々木達治  
酢で畳拭き上げ土用太郎かな 山田和歌子  
遠雷や明日失う乳房撮る 駒木みどり  
象の死やひまはり多き献花台 松本清美  
弟は葎切の鳴く川で逝き 高橋エイ子  
値引きされ名前まだ無い子猫かな 長谷川佐知子

2020年10月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

---

中村和弘

<縫包>

猪の足跡深き無縁墓  
豚糸抜けば朝顔萎みけり  
アベさんの小さなマスクも厄日かな  
猫の餌に魚の腸煮る雨月かな  
空船を運河に連れ秋暑し

ハノイ

ベトナムの色濃き月ぞ枯葉剤  
縫包どつと崩れる秋の暮

---

大石雄鬼

<死角>

花火から生まれて妻は首細し  
土用波より末つ子の逃げてくる  
火山見ては濁つてゐたる裸かな  
手の甲を置きざりにして天の川  
ハモニカの曇りの中の帰燕かな  
秋空の死角に湿布してみたり  
肉体のごとくに冷えし乾電池

---

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

烏瓜戦時の神のにはほひする	小菅 白籐
春の月羽化をこらえる震えかな	瀬間 陽子
撥ね出たる赤子の足や夏祓	石川真木子
発電機の唸るがごとく大暑かな	上田 桜
レンズより鳩の子一羽出てゆけり	小川 葉子
コロナ禍の紫陽花の白まばゆけり	大野和可子
星まつり地上に泥の川溢る	堀 尚子

魔の山は口裂けており山開き	渡部 洋一
月山と鳥海山に蜘蛛の網	小林 政女
白神を背に金の鮎舞ひにけり	大瀬 響史
雨紅し蕎麦の狭庭に千の渦	佐々木貴子
釣竿を一つところに打ち涼し	徳竹三三男
水無月の壁から剥がる人の影	保坂 純子
土管一本釣り上げている酷暑かな	小川 七穂
やまももをふふみて見遣る遠淡海	山田和歌子
ジャカラダ病棟青く林立す	土岐 祥恵
をりこみのチラシ繚乱桜桃忌	佐々木玉枝
千枚が一枚となる青田かな	安住 正子
ママが好きママが大好き苺より	大塚みづゑ
咲き切つて淀みとなりし山の藤	内海 新

2020年9月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

今月の俳句 中村和弘

< 潤谷 >

荒壁の破目覗けば蓮の花

錦鯉出水に乗りて奔りけり

水牛の角を魔除に稲の花

五郎太(ごろた) 石のひとつひとつに原爆忌

潤谷を鹿の影過ぎ盆の月

地図のごと牛皮干され晩夏かな

船虫の鋼光りに日の盛り

船虫の竜宮祭に紛れたり

今月の俳句 大石雄鬼

< 神津島 >

汗が汗のりこえてゆく神津島

あの山はきつと甘くて水母浮く

夏空が目玉にあふれた多幸港
天上山が雲より墮ちてきし八月
黒曜石に稲妻のこり展示室
がさがさの海なり盆の神津島
マヨネーズほどの秋夕焼がある

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
花たちばな鳳凰の脚儼乎（げんこ）たり	小竹ヒサ子
魂魄の眉目おとがい鳩を吹く	吉本のぶこ
春の月羽化をこらえる震えかな	瀬間 陽子
アマンダのピンクの日除け待たさるる	永井アイ子
種物にまた流れくる御念仏	大類つとむ
梅天の丹頂擬卵を抱いており	小川 葉子
大夕焼貨車から降りる牛の群	牧 ひろし
茄子さげて王女が叩く夜の門	佐々木貴子
絃楽の響き逃げだすほととぎす	徳竹三三男
潦（にわたずみ） 又 潦 墓（ひきがえる）	多摩川 州
疲れたる線路のナット草いきれ	河重 卓三
廃線の赤き鉄橋河鹿鳴く	北原 千枝
生れしばかりの折鶴傾ぎ梅雨に入る	古川 章雨
コロナ船癒えて海原麦の秋	土岐 祥恵
夏鴨の少し登りて遠く見る	駒木みどり



ひとしきり淋しき空路花林檎	森井美恵子
花莫藪の花に赤子の眠りけり	松本 清美
玉ねぎの玉がはみ出す低気圧	地葉 幸南
風鈴を一つ鳴らして地震くる	小橋めぐみ
虫売りの残りの声の清々し	丸山 健一

-----

2020年8月号

※以下、原句にルビがある場合は、ソフトの都合により、カッコ( )で表しました。

今月の俳句 中村和弘

< 蟬の声 >

山桃の焦土の端を染めており

暁の羽化の蟬なり青白し

原爆のドーム聳ち蟬の声

長崎の鐘を鳴らせと蟬しぐれ

洪水の泥に群れ咲き苜蓿

万緑の土偶に太き妊娠線

古代鱶あらわれそうな出水なり

今月の俳句 大石雄鬼

< 裸 >

春の虹くづれて孵化の家しづか

富嶽百景春の鞆帯いためけり

心臓を崖にたてかけ岩つばめ
梅雨入りのまだやはらかき腕枕
てのひらに光の逃げて繭を煮る
相槌のなめらか虹の垂れこめる
大陸の影のちぢまる裸かな

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
春の川テニスの音は空よりす	大類つとむ
ピストルの指まつすぐに朝焼け	瀬間 陽子
灰あまし筍の皮むきたる手	浪本 恵子
春行事ポスターあまた飛び去りぬ	秋元 道子
筍に二度つまずいて墓参り	渡部 洋一
ストーンサークル夏至の祭の土偶たち	今田 克
マネキンのマスク姿にサングラス	大瀬 響史
球場の人なき春の万の席	富田 栄子
家屋敷小島のように代田かな	多摩川 州
蒲公英の綿毛吹く児の目が寄りぬ	西牟田ふみ子
母を乗せ友も乗せくる卯波かな	河重 卓三
胸深く老の匂ひに初浴衣	三浦星津女
葬送の記憶の茅花ながしかな	中村 穂
尿（いばり）する音の響きや夏きざす	古川 章雨
田植機音さやか原発禍より十年	吉見 弘子

春の川檻襖重なる中洲かな	駒木みどり
地中海へ鎧戸ひらきゼラニウム	土岐 祥恵
パンデミック草木は八十八夜かな	塩坂 泰子
鳶職の地下足袋のゴム灼けにけり	加藤 浩二
友禪を流す片辺の残り鴨	安住 正子

2020年7月号

今月の俳句 中村和弘

<端午>

筒成して鉋屑跳ぶ五月かな

白砂を三和土に撒きて端午来る

腐葉土の匂いだちたる旧端午

箱河豚の媚びるようにも鱈使い

神牛の喉の皮膚垂れ穀雨かな

山椒魚（はんざき）の創（きず）に藻が生え飼われおり

東海の松のあわいに氷旗

風の筋ふつと見えたり氷旗

荒天に蔓をのばして蛇莓

蛇莓食いし焦土の道現れる

疫病船となりて漂う夏の夢

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ（ ）で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<日向のやうな>

畔塗つてうしろ姿を晒しけり

冷素麵胸をちひさくして食べる

恋人の爪の長さの虹がある
朴咲いて日向のやうなからだかな
夕立のなかで老いたる目玉あり
水槽の藻のはげしくて昼寝する
天国の灯はかすかなりかたつむり

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
人間以外みないきいきと花万朶	岩崎 嘉子
橋にみな名前のありてつばめ来る	永井アイ子
冷蔵庫の黄の眼のこぞり茎立ちぬ	吉本のぶこ
山の蝶砂の曼荼羅廻りけり	加藤 明虫
白雲も白鶴も来ぬ春の夢	山本高分子
花杏道の下にも道眠る	佐藤 禎子
切株は森の墓なり藁ゆる	渡部 洋一
春泥の乾きし街や人遠し	牧 ひろし
石粒の群に石投げ長閑なり	佐々木貴子
春愁や針山握り針探す	西牟田ふみ子
靖国神社へ櫻隠しとなりけり	石堂つね子
春風や坂の空缶立ち上がる	大泉 秀明
国語辞書耀いてをり啄木忌	河重 卓三
駒返る草に抱き合ふ道祖神	北原 千枝
菜の花の種になる音地の暮れぬ	保坂 純子

炙られて海苔のかがやく朝かな	鳥巢 有子
近すぎて見えないきずな朧月	桜田 花音
春耕や祠手厚く引継がる	高橋 仁
縄文の炉跡の丘に山櫻	伊藤 岳栄
風船は耳をかくして飛んでいく	三宅 桃子

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

2020年6月号

今月の俳句 中村和弘

<草の塊>

死貝より泥のたらしと春の夕

鶏の血を鶏が啄み啄春の昼

天空に無菌病棟桜散る

耳鳴の激しきゆえにつつじ燃ゆ

石垣の石にタテヨコ鯉のぼり

鴉の仔従(つ) いてくるなり松の風

万緑の上に城砦崩れおり

風穴(ふうけつ) は巨き喉なり椿満つ

捨造の名の叔父生きて終戦日

猫の吐く草の塊土用なり

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<水になる>

雪解けて街のまんなか・凹みけり

固形石鱖籠のごとくひびわれる



種蒔やマスクの内の荒れてゐる
筍をおもりに祖母の歩きくる
広告のなかまで卯の花腐しかな
仰向けになれば急流多佳子の忌
水になるやうに眠りて梅実る

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
絵の中の窓は混沌三月来	稲村茂樹
淀みとも薄氷ともなく死せる川	當山孝道
桜疲れ車は車積んで過ぐ	永井アイ子
花馬酔木日の陰る側荒びすすむ	加藤明虫
血潮透く土筆よかくも乾きおり	石川真木子
カピバラの緑糞浮かべ春の水	小川葉子
瀬戸内の渦に陽の差す遍路かな	牧ひろし
三月の海へ禱りの影絵かな	荒堀かおる
夕永しボレロに菓罐の蓋が鳴る	大泉秀明
鳥帰る凸面鏡に映る街	及川明子
起重機の首を下して三月尽	温井幸子
優しい歌易しく歌う揚げ雲雀	前塚かいち
産土の山細りゆく雪解川	田中三桃
ウイルスの予言書捜す弥生かな	松浦廣江
さきたまの古墳の周り春田打つ	根岸三恵子

つくし摘む土に福島思ひをり	別所弘子
播磨路の雌雄の二山鳥交る	竹田晩成
核心を照らさぬランプ鎗鳥賊へ	三宅桃子
鶏冠の艶増す狭庭名草の芽	川上みさ子
春霞ガマに鳥影人の影	伊藤岳栄

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

2020年5月号

今月の俳句 中村和弘

<蟻の巣>

春昼のボルト一本緩みおり

蟻の巣も土竜の穴も消毒す

尾の如きもの跳ねつつ消えし春の昼

花杏笛吹川を押し出せり

かいつぶり潜れば閉じて花筏

寒晴の珊瑚は砂となりにけり

豎穴の住居を囲み馬肥し

水杣に登りていたる花筏

白魚に誑されん曇り日よ

繫留の空舟ばかり桜満つ

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ（ ）で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<ぼかん>

人影のすこし泡立ち羽子をつく

なまはげの息のあふれてゐる夜空

炭酸をごろごろのんで雪残る
太陽のぼかんとしたり蜆汁
春陰やアラビア糊のやはらかし
米粒のどんよりとして涅槃西風
あたたかや葉のやうな涙ながす

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
如月や沖縄の彩の千羽鶴	當山孝道
木枯のてつぺんにいる郵便夫	瀬間陽子
ダイバーの風呂は廃船アロエ咲く	石川真木子
犬ふぐり富岳を仰ぐ丘に生（あ）る	小竹ヒサ子
冬銀河われ分断の地に立てり	竹内實昭
福豆のひとつ机上にヨブ記読む	堀 尚子
洗面に嗽のコップまだ二つ	今田 述
動かずば木の瘤とならむ寒雀	牧ひろし
校門の影を支へる霜柱	大泉秀明
動くものあれば飛び込む冬の鴨	徳竹三三男
豊年の藁塚雀にぎにぎし	大内政江
寒林に戻る戦後の開拓地	多摩川州
朽ち舟に語りかけをり冬の月	河重卓三
春寒し鱗（いろくづ）流す魚市場	猪狩鳳保
虎落笛鏡の底の刃かな	小林千香子

蜃気楼東京湾はせり上がる	森井美恵子
刀剣に三寒四温の翳はしる	白鳥青羽
白足袋の鶴の舞台や空舟	川上みさ子
地に満ちて雨水の街の沈みゆく	俵征市郎
大寒の明け方の月魔女の月	藤倉頼江

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

2020年4月号

今月の俳句 中村和弘

<惑星の瞳>

筆立の孔雀の羽根も春暑し

生えたては花びらのごと蟹の爪

病院船となりて全灯春暑し

玄室は宇宙のごとし桜咲く

水槽の鯛に見られし立ち雛

象の毛は針のごとくに涅槃西風

涅槃雪溶けし辺りに兎罌

薄氷を輝やかしたる雑木山

汚染水のタンクを据えて下萌ゆる

惑星の瞳の劇面の少女夏めける

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<初閻魔>

初市の眼玉が水にながれけり

子の靴の先のあまりし初閻魔

顔の奥まで坂のつづきて梅咲けり
ふらここの鎖が風邪をひいてゐる
ひちかけは戦車のごとし堇咲く
草餅に悪寒のやうな筋ありき
虹鱒のからまつてゐる秩父かな

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
初鶏の干支のねずみに叶ふまい	小菅白藤
暖房にゆるる魔除けの唐辛子	大類つとむ
鶴（こう）の鳥の紅きまなじり冬田打つ	岩崎嘉子
相聞は深きむらさき春りんどう	吉本のぶこ
長き夜や月横切る飛行機のみし	斉藤悦子
掃除器の中もきれいに年用意	小木曾あや子
秋澄みて足長少女横並び	大野和加子
つり銭に土の混じりて福寿草	富田栄子
凍てる朝彫刻のよう鳩の群	古閑容子
雑煮椀底の絵の松立ち上る	及川明子
カレンダー先ずは初富士讃えけり	温井幸子
四十五億歳の星に頼りて去年今年	西牟田ふみ子
大津絵の鬼と飲みたき年酒かな	猪狩鳳保
日に向きて真正直や冬菜畑	山田和歌子
強霜の光あまねき笹生かな	田中七子

半島に海二つあり初明り	別所弘子
凍蝶に触れ鱗粉のつるつるす	安住正子
薔薇色に尖り小さく枯野ゆく	三宅桃子
玄関に霧の匂いの三日かな	内海新
雪暗き古刹の燭火みな揺れる	菊池雅子

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。



2020年3月号

今月の俳句 中村和弘

<鳥獣>

奥鬼怒にて四句

枝移る猿の落とせし涅槃雪

鳥獣の足跡しるき涅槃雪

蜜蜂の骸散らばる春の雪

腐木より泡の生まれて春の雪

地平まで樹の根拡がり雪解かな

汚染水のタンクにしとど雪解かな

開拓村の柱の遺る雪の原

戦中の下肥におう梅見かな

海亀の甲羅の楮し雛祭り

薬を食みいる鹿の身籠もれり

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<狐かな>

靴底にぎらぎらとして山眠る

凍滝が胸のちかくに崩れけり
禅寺の水のあふれて山眠る
眠る子の裏がへりたる狐かな
大砲の口のしづかに歌留多とる
心臓のまだ小さくて雑煮喰ふ
干からびし大マスクして若菜摘む

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
白壁に無数の穴や古暦	故 浅見玲子
タピオカに終に馴染めず開戦日	浅沼真規子
凧をこつと生みたるむかで山	吉本のぶこ
唐突に生きようとする牡蠣の白	瀬間 陽子
石棺に水抜き穴山眠る	十亀カツ子
熊の糞マタギの山に鎮座せり	渡部 洋一
浜風の吹き抜けてゆく掛大根	岩沢 みえ
浚渫船とこころ定まる十二月	富田 栄子
冬めくや床屋の鏡見て話す	大泉 秀明
しぐるるや天女のごときスカイツリー	河重 卓三
石ひとつ乗せて凍てたり潦	中村 穂
夕空やまだ鳴つてゐる海嬴と海嬴	藤川 夕海
森閑と家具せまりくる霜の夜	鳥巢 有子
冬の灯は集落（むら）全体の息づかい	雨宮 和彦

白鳥の渡り来し声友逝けり	古川 章雨
冬の虹脚のあたりに師の住まひ	山田和歌子
錠固き義士供養箱冬ざる	根岸三恵子
球場灯楯円に震ふ寒の入り	吉川 孝子
菊刈つて乾びし蜂をこぼしけり	安住 正子
霜降りし朝のカフェに作家をり	小村 寿子

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ（ ）で表しました。

2020年2月号

今月の俳句 中村和弘

<擬態>

マンモスの牙に乗りたる寒の月

水槽の砂に擬態し鱒死せり

落石の谷に木霊し梅咲けり

桜島の噴煙染めて初日かな

月光を纏いしのみぞ鶴凍てし

死魚の腸ひきずり出して初鴉

流氷の使者の如くに尾白鷺

裏山に大きな幣を年の神

初風の鳩の骸は羽毛のみ

氷片を挟みしままにタラバ蟹

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<いつしか>

晩秋のほつそりとしてゐる子孫

山奥のぐらぐらとして障子貼る

いつしか眠る白菜のかけらのやうに
顔にすきまあれば冬蝶ちかづけり
太陽の下にかぶれて花八つ手
肉体にとちこめられて犀冷ゆる
神経のごとき聖樹を飾りけり

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
物憑きのごと冬耕の翁かな	浅沼真規子
冬茜終りの日にも手を洗ふ	浅見玲子
鳥渡る自由でさみしくてビー玉	瀬間陽子
烏瓜かざり路上に生活す	石川真木子
六月の激写されたるガマの闇	竹内實昭
石柱をベンチとなせり雁渡し	佐藤禎子
軍用ヘリの音のしかかる泡立草	十亀カツ子
嵐の夜収穫（おさ）めし粃の薫り立つ	今田 克
地の紅は水没林檎千曲川	田中眞青
自販機のひとつ明るき刈田道	大泉秀明
カウンターの司書の背中の草虱	及川明子
黄落の開拓の村輝けり	小保方京司
賽銭を担ぐ神主夕しぐれ	猪狩鳳保
雪女身の内白湯の走りたり	保坂純子
革ジャンパー脱ぎて青年放電す	鳥巢有子

行く道の無くて捨て田の草錦	村上鮎黒朗
装いもせずに千年秋の巖	小林千香子
秋の雲飛竜となりて西へ行く	藤倉頼江
蓬来島の白き梯子や鳥渡る	松川和子
胎内湖全山もみじの中静か	平田正枝

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ( )で表しました。

2020年1月号

今月の俳句 中村和弘

<噴煙>

無音にて艦船現るる初霞

流木の積みあげられて年新た

ヒマラヤの嶺の映りて浮寝鳥

雪中梅に力感ありて五合庵

鼻に洄（うろ）をささげて林檎の木

汚染ゴミの隅に全き毛糸玉

原発の門にのせおく毛糸玉

大王鳥賊の巨眼いつしゆん火のごとし

子安貝の殻にあふれて花の雨

桜島の噴煙染めて初日かな

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ（ ）で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<漂白剤>

水濁れて男結びのありにけり

神無月漂白剤の垂れてゐる

花束のごとく湯ざめをしてみたり
炬燵から足出て街のさびしさう
鷹舞ふや舌の奥まで晴れわたり
心臓の近くにねむる冬鷗
凍鶴の腹の中まで林かな

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
天上の北窓塞ぐ目鼻見ゆ	吉本のぶこ
白山茶花にひと刷毛の紅小姓町	佐藤禎子
赤い羽根外して鶏舎くぐりけり	牧ひろし
霊場をいだく端山も粧へり	富田栄子
一閃の鳶が落とせし鴟の贅	岩沢みえ
押入れの杉戸の柁目盆の家	十亀カツ子
耳底に鳴き砂の音神送る	上田 桜
秋の曇（どん）親鸞像の笠の内	小川葉子
リュウグウの欠片は無辺秋灯	故 伊藤泰子
秋草や子の髪を切る銀砂の音	佐々木貴子
足柄峠武士の伝へし笛の秋	今田 克
搜索のライトに浮かぶ曼珠沙華	多摩川 州
三国志人形劇に後の月	森池義子
星のごと岩塩坑の光る夜	小林千香子
五箇山をうねりうねりて稻雀	根岸三恵子



お狐の祠流るる秋出水	石井節子
骨塔の今に残るや風芒	高橋 仁
雪隠に鞍馬天狗の捨団扇	加藤浩二
鯨幕大きく揺れて菊薫る	平 恵
飛石の中に石臼秋深む	宇佐川うさこ